

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No. 109
2009(平成21)年9月8日(火)発行



まるき 原爆図 丸木美術館

ちょっと不便な所にあります、訪ねてみませんか。

○丸木位里いり・丸木俊とし夫妻<写真>が生涯をかけて

描いた『原爆の図』連作第1部～14部(第15部「長崎」は長崎市原爆資料館に)、『水俣の図』『南京大虐殺の図』『アウシュビッツの図』『水俣・原発・三里塚』が常設されています。月曜休館。○埼玉県東松山市下唐子 1401。TEL0493-22-3266 東武東上線森林公園駅下車。関越自動車道東松山インターより小川方面10分が便利です。○写真などのコピーでなく、巨大な屏風の原画を前にすれば、その迫力に言葉を失ってしまいます。



どうせ被爆者だからと

原発で働こうとしたが...

南相馬市原町区 Bさん(75歳)

私は昭和八年、長崎市中小島町で、

二男六女の二男として生まれ、今年七五歳です。中小島町というのは、長崎駅からずっと南の方で、爆心地からは四キロメートル以上離れています。家は商売をしていて、戦時中は食糧とか衣類の「配給所」でした。

八月九日当日、父は三菱造船所の技師で出勤していましたし、兄は十七、八歳で学徒動員というか徴用で、長崎の川南造船所で働いていました。

昭和二十年八月九日、長崎市小学五年生の私は自宅で被爆

長崎に原爆が落とされた八月九日、空襲警報が発令され、やがて警戒警報に変わってみんなが安心していった時、B29がやってきて原爆を投下したと記憶しています。

私は小学五年生で、その時は暑くて家でパンツ一枚でマンガ本を読んでいた。爆音が聞こえたので家の庭に出てみると、B29が高いところを飛んでいて、十五センチぐらいに見えました。ところが、そのB29から、キラキラというか、ピラピラというか、とにかく何か光ってゆつくりと落ちてきました。それが実はパラシュートをつけ

た原子爆弾だったんですね。

それまで何度もアメリカの飛行機がピラをまいていましたので、また「日本は負けた」とか、「避難せよ」とかを印刷したピラだと思っていました。

「ゴカトン」という感じで

突然の光、そして爆風

はだしのまき真山へ逃げた
それから十分か十五分たつて、私も目をそらして庭にいる時、突然ピカッとすごい光を感じました。焼夷弾が落ちたな、隣あたりか、かなり近いところに落ちたな、大丈夫か、などと考えていましたから、光の二、三分あつたと思えます。

今度はそのすごい爆風です。木っ端とか、塀の破片とか、屋根の瓦などが吹き飛んできましたが、幸い私は塀に囲まれていてけがはしませんでした。家の中にいたら、箆の上のものがみな落ちたりして危なかつたと思います。

それからのはだしのまま、家の裏に住んでいたおばあさんのところに跳んでいき、姉と妹と五人で家の裏山のお墓のところに避難しました。

大きなきのこ雲がモクモクと町のあちこちから火の手が

長崎駅の北の方にはモクモクと「きのこ雲」ができていました。火薬の大爆発か、工場の薬品でも大爆発したのかと思われました。山の上だったので、町のあちこちから火の手があがっているのがよく見えました。「きのこ雲」はだんだん大きくなって、なかなか消えないし、びつくりしましたね。

「アメリカ兵が上陸してくるかも」

夕方から夜になっても、三人で裏山のお墓のところまで寝たりしていたのですが、自警団の人がやってきて、「夜にアメリカ兵が上陸してくるかも知れん」と言うので、夜の十一時頃だったのでしようか、親戚を頼って、三十キロぐらい離れた諫早(いさはや)に避難することになりました。一晩中歩き続けましたが、途中でおにぎりの炊き出しをもらったりしました。



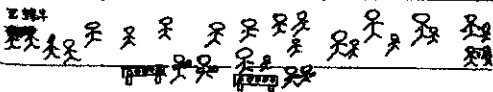
救護隊のおむすびを食べる元気もない少年(長崎)

「写真資料・長崎」より

翌十日に諫早に着きましたがすぐに電々公社に勤めている人に連れられて、長崎の家に引き返しました。幸い、父や兄も無事で家に帰ってきていてホッとしていました。アメリカ兵も来ないだろうと、また家族一緒に家で生活するようになりました。(裏のページへ)

Bさんが描いた長崎の被爆の様子

長崎の爆心地の浦上地帯一帯は火の海で、その火の明かりで、遠方からも長崎の惨状が分かるほどだった。



島原や諫早（いさはや）方面への国道を、親戚や知人を頼って避難する老人や女、子供たち。沿道には農家の方たちが、おにぎりを出して元気づけてくれた。

（表のページより）

リヤカーを引いて爆心地付近へ

それから一週間くらい、親戚や近所の人で爆心地の方で行方不明の人がいたので、父や兄や近所の人と一緒にリヤカーを引いて、爆心地近くに出かけて行きました。その頃、リヤカーを持って行ったのは「配給所」だった私の家ぐらいで、そんなことを頼まれたんだと思います。爆心地の山里町を中心に、やけどをした人、死んだ人、道に倒れている人、防空壕の中、働いていた所、避難先、川の中の死体まで捜して歩きました。

二十体ぐらいの死体を焼く

目的の人をようやく見つけ出し、リヤカーで運び、全部で二十体ぐらいを焼きました。トタンの上に死体を並べ、倒れた家から木を集め、火

をつけて、完全に骨になるまで十五時間ぐらいかかったと思います。

小学五年生でそんなことを手伝いましたが、こわいとも思わなかった。いつも家には父も兄もおらず、家中で男子は私ひとりだったので期待もされ、責任感もあったし、無我夢中だったのかもしれない。

今初めて話すことで、忘れられないのは、やけどやケガをした人々が「水を飲ませてくれ、水をください」と叫んで、私の足に抱きついて離そうとしない。水をやると死ぬぞと厳禁でしたが、私はある人に水筒の水を飲ませると、本当にその場で亡くなってしまうました。今でも心に引

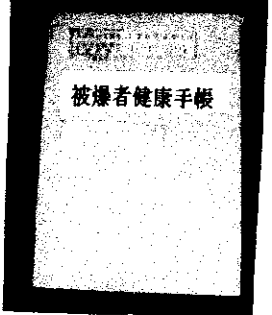
健康だったのに突然...

その後、長崎の高校を卒業し東京に就職。健康で、がむしゃらに仕事をし、原爆や放射能の後遺症なんか全く考えもしませんでした。

ところが、二十年たった昭和四十年頃から、どうも体の調子がおかしい。病気がかりやすく直りにくいし、特に風邪をすぐひいて寝込むことが多くなりました。これはおかしいな、働き過ぎかと思いましたが、長崎の姉妹たちにもすすめられて、昭和四十五年十二月に初めて「被爆者健康手帳」を交付してもらいました。一番重度の「一号認定」です。

昭和四十七、八年ごろからは骨の関節がおかしくなり、ちよつと力仕事をすると手足がしびれたりして、ごはん茶碗も持てないほどです。特に足や膝の関節が弱くなって、もう現在では正座もできません。やはり投下直後の長崎市内を毎日歩いた時に、被爆したのでしょう。

病弱で仕事にもつげずに
昭和五十年に仕事の関係で原町に



Bさんの被爆者健康手帳。「法第1条・1号認定」と記されている。

きましたが、高血圧、真性糖尿病、両変形性膝関節症、頸椎不全損傷、軽度の脳梗塞などの病気をかかえて寝込むことも多く、右足は完全に変形しちんばになっていきます。職にもつげず自殺を考えたこともありましたが、どうせ被爆者だからと大熊町の原発で働こうとしましたが断られました。まあ、なんとか女房に働いてもらい、私は家の中の仕事をしてこまめやつてきました。

子供は男女の二人で、生まれた時からずっと、私の被爆の影響がないかといつも本心に心配していました。現在は結婚してホツとしています。

手術の時、きのこ雲の幻覚が

平成一八年二月に大動脈のバイパス手術をした真つ昼間、麻酔のせいだったのか、病室の窓の外に風船が見えそれが大きくなり、またきのこ雲が襲ってくる幻覚症状が表れて、ぞつとしました。また毎年八月になると体の具合が悪くなり、寝込んだりします。今でも飛行機やヘリコプターの爆音で、B2を思い出してこわい。原爆がトラウマになってます。

今度戦争が起きればすべては終わり、生きてはおれない。平和はいないかと思えます。子供にも戦争なんかに行くんじゃないよと言ってきました。お話を聞いてくれてありがとうございます。またお出で下さい。

◆この体験は、1982（昭和57）年10月31日（『私も証言する』掲載）と、今年7月にBさん宅を訪ね直接お話をうかがったものを文章化したものです。27年ぶりにお会いしましたが、様々な病気に負けないで奥様と二人で暮らしておられます。「はちまひ九条の会」のお話をすると、「大事な活動だ」とすぐに入会され、嬉しくなりました。